

2 全体会 トップ対談 要旨

San-En-Nanshin Summit 2010 in Minamishinsyu

■ テーマ「地域主権時代における三遠南信地域の目指すべき姿」



<コーディネーター>

社団法人東三河地域研究センター
常務理事 戸田敏行 氏

<パネリスト>

浜松市長 鈴木康友 氏
豊橋市長 佐原光一 氏
飯田市長 牧野光朗 氏
浜松商工会議所会頭 御室健一郎 氏
豊橋商工会議所会頭 吉川一弘 氏
飯田商工会議所会頭 柴田忠昭 氏

平成20年3月に「三遠南信地域連携ビジョン」が策定され、この地域では、これまで以上に交流・連携事業が推進されています。

今回のトップ対談では、こうした三遠南信地域の活動を確認し、今後、目指すべき地域の将来像を地域の皆様と共有するために、三遠南信地域の行政及び経済界を代表して、浜松、豊橋、飯田の市長及び商工会議所会頭が対談します。

コーディネーター／社団法人東三河地域研究センター 戸田常務理事



今回、進行をさせていただきます東三河地域研究センターの戸田と申します。

3年前、第15回三遠南信サミット2007in 南信

州がこの会場で開催され、この場で「三遠南信地域連携ビジョン」が発表されましたが、大変な熱気であったことを覚えています。

翌年5月に豊橋市で、浜松、豊橋、飯田の市長および会頭のみなさんによるトップ対談が開催されました。

それから3年経ちましたが、平成24年度にSENAは新連携組織への移行を予定しています。そこで、「地域主権時代における三遠南信地域の目指すべき姿」というテーマで、もう一度、トップ対談を持って、その方向性を確認するために、今日の機会が設けられております。

それでは早速、トップ対談を始めさせていただきます。

三遠南信地域連携ビジョンは、ご承知のようにインフラにかかわる「道」、産業にかかわる「技」、観光にかかわる「風土」、中山間地・防災の「山・住」と、大きく四つに分かれています。

今回は、この四つの分野について、まず、各市長、会頭から、これからの方向性、あるいはご提言を伺います。

それから、新連携組織に関連する部分ですが、このビジョンをどのように進めるか、そのあり方などについてお伺いをします。

それでは早速、三遠南信地域の核となる「道」の部分に関するインフラ整備、今後の三遠南信の姿をどうお考えかについてご意見をいただきます。

パネリスト／飯田市 牧野市長



三遠南信地域連携ビジョンを「絵に描いた餅」にしないためには、その軸になる道路インフラ、あるいは鉄道インフラの整備が非常に重要と考えます。

東西軸としては、既に東海道新幹線あるいは東名高速道路が整備されていますが、それに新東名高速道路を加えれば、今のところ、東西軸は非常に整備が進んできていると思います。

また、山側の東西軸としては、いよいよリニア中央新幹線が現実のものとなり、2027年に開通が予定されており、三遠南信の連携ビジョンの中でしっかりと位置づけられているリニア中央新幹線飯田駅が、まさに三遠南信の北の玄関口、また、長野県の南の玄関口として機能することが期待されます。

さらに、これらの東西軸を結び、圏域の南北軸となる三遠南信自動車道が、何よりもこの三遠南信地域の一体的な発展のため、また圏域の中央に広く位置する中山間地域における「住民の命をつなぐ道路」として、早期に開通するよう関係機関へ働きかける必要があります。

それには3つの地域が、さらに力を合わせて、一つになることが大切と考えます。

パネリスト／飯田商工会議所 柴田会頭



「道」は、インフラの基本です。この南信州地域では、三遠南信自動車道とリニア中央新幹線という二つの大きな懸案事項があります。

早期開通を目指すものの、開通はまだ先で、リニア中央新幹線は17年後、三遠南信自動車道は予算次第という状況で、情勢により開通が長引くことが懸念されています。

今、飯田市民の間では両者の開通を目指して、様々な団体が開通に向け、どのようなまちづくりをするか、どのようなまちにするかをそれぞれの立場で活発に議論されています。

いずれにせよ、このインフラの整備が数年あるいは十数年後に完成することで、この地域は大きく変わる事となり、この二つの機会を有効に使うことによって、当地域のみならず、この三遠南信地域全体が大きく飛躍できると期待しています。

また、リニア中央新幹線のルート問題については、事実上、南アルプスルートということで決着がついたようですので、あとは各県一駅と言われている中間駅として、この南信州地域に飯田駅をどういう形で設置していくのかということが、喫緊の課題となっています。

いずれにいたしましても、三遠南信自動車道の早期開通とリニア中央新幹線飯田駅の設置に向け、引き続き働きかけを行うとともに、地域において大いに議論をしながら新しいまちづく

りを進めることが、たいへん重要と思います。

パネリスト／浜松市 鈴木市長



今、リニアに対する大変熱い思いが語られましたが、実は、このリニアの中央新幹線については、私どもも大変関心を持って見えています。

というのは、直接的には、この南信州の皆様にとって、大変重要な東西交通となってくる訳ですが、私ども東海道新幹線を抱えている地域から見ても良い影響があります。

今、東海道新幹線というのはほとんど通過交通であり、「のぞみ」が主体です。豊橋駅でも同様と思いますが、今、1時間に「こだま」が2本と「ひかり」が1本、たった3本しか浜松駅には停車しません。しかし、このリニア中央新幹線ができることにより、東海道新幹線における「のぞみ」の役割をリニア中央新幹線が担うこととなり、東海道新幹線のダイヤが「ひかり」や「こだま」中心へとシフトしてきます。

これは、私ども浜松市にとっても、豊橋市さんにとっても大変に喜ばしいことですので、ぜひ、この地域挙げて、このリニア中央新幹線の推進をしっかりと応援をしていきたいと思いたし、ぜひ南アルプスルートとなり、飯田に駅ができるように応援をしていきたいと思いたし。

また、道路に関しては、私どもの地域では、いよいよ第二東名高速道路、いわゆる新東名の静岡県内における供用開始が迫っています。

この供用が開始されれば、さらに三遠南信自動車道の必要性や重要性が高まることとなります。今、新東名の引佐JCT（仮称）から一部

供用開始に向けて、三遠道路の建設が進んでいますが、やはりこれは飯田まで一体的に整備をしていかないと十分な効果が発揮されません。

今後、国の投資的経費はどんどん縮小されていくため、当然その中で選択と集中をしていくこととなり、地域がその重要性をしっかりと説明していくことが求められます。

昨年、新しく政権が交代をしましたので、国土交通省の政務三役にも三遠南信自動車道の必要性をしっかりと説明をしました。三遠南信地域の連携から始まり、全国でも稀に見る県境連携の中で骨格となる道路であることについて、国としても、しっかり認識してもらえたと思っておりますので、厳しい予算の中ですが、何とかこの整備だけは推進されるよう、みなさんと頑張っていきたいと思いたし。

パネリスト／浜松商工会議所 御室会頭



平成23年度中に鳳来IC（仮称）から引佐JCT（仮称）の区間が供用開始される予定となっています。

これにより東三河地域と遠州地域が県境を越えて結ばれ、人、物の動きにも今後、新しい変化が出てくるのが期待されます。

ただ、三遠南信道路全線開通には、まだまだ時間を要します。今後、経済情勢や産業構造が激しく変化していく中で、完成までの間に、その変化に追いついていけるかどうか心配されることから、やはり、なるべく早い開通を望みます。

2年前から、三遠南信地域内の八つの信用金

庫で「三遠南信（8信金）しんきんサミット」を開催しています。それぞれの地域の様々な地場産品、特産品を一堂に会して物産展をしていますが、大変な人気で、あっという間に商品が完売する状況です。今年は明日、11月13日に第3回三遠南信しんきんサミットとしんきん物産展が、飯田市公民館で開催されますので、皆様方もご来場いただければと思います。

こうした相互の交流が密接に行われていくことで、新たなニーズの開拓あるいは産業振興が確実に推進されますが、その効果を高めるためには、やはり移動時間を短縮して、利便性を高める交通インフラの整備が必要です。

なお、先ほどからリニア中央新幹線の話が出ていますが、これは我が国にとって久しぶりの大型プロジェクトとなります。将来の展望に想像力を働かせて、開通したらどうなるのか、開通に備えて各地域は今からどんな対応をしなければよいかなど、夢を持ちながら、しっかり検討しなくてはならないと思います。

パネリスト／豊橋市 佐原市長



皆様方からお話がありましたリニア中央新幹線、そして新東名高速道路、三遠南信自動車道ができますと、この地域の東西、そして南北の基軸ができ上がることとなります。

私どもは、常日ごろから、こういった道がどうして必要なのかを考えると、幾つかの切り口を持って考えています。

一つは産業経済を支えている「力の道」、そし

てもう一つは生活や人の命を支える「命の道」、最後に地域の文化、お祭り、人などを支える「絆の道」といった側面を持って道を語り、道の整備を考えていかなければならないと思っています。

私たちのこの地域においては、陸の道が今の道路ですが、併せて海の道、空の道があります。

海の道では、東三河にある三河港や遠州にある御前崎港といった地域の窓口があり、空の道では、遠州にある富士山静岡空港という地域の窓口があります。こういったものをきちんと結びつけ、地域の力を外に向けて発揮していくということも道の大事な姿だと思います。

また、三遠南信自動車道と引佐連絡路の南北軸についても、三ヶ日で止まることなく、国道1号、名豊道路まできちんとつながり、伊良湖岬まで到達して完結するのではないかと思います。

世界に四つしかない大きな自動車港湾の一つの三河港など、地域が持つインフラの力を最大限生かすためにも、この道がつながってこそ初めてその結果が残していけると思います。

私たちは、そのミッシングリンクをなくして、つながり、さらに三つの地域がまたつながって、そして一緒になって力を上げていく。そのために努力していきたいと思っています。

パネリスト／豊橋商工会議所 吉川会頭



三遠南信自動車道や新東名高速道路の整備が進み、三遠南信地域を取り巻く広域的な道路のネットワークが形成されつつありますが、それ

らの道路網と各地域を結び、市民生活や産業活動を支える地域道路の整備も不可欠になっていると考えます。

東三河地域の国道23号バイパスについては、ミクロ的な視点では、三河港臨海部と周辺工業都市をつなぐ道路ですが、三遠南信地域全体で見れば、新東名高速道路や東名高速道路と併せて、環状道路が形づくられるため、豊橋、浜松を中心とした三遠地域の産業循環を大きく変える可能性を秘めた道路ではないかと考えます。

また、渥美半島と鳥羽を結ぶ航路を運航する伊勢湾フェリーですが、愛知、三重両県と田原市、鳥羽市の出資によって航路が存続されましたが、こちらも道路と同様に広域観光を推進する重要なインフラであると認識しています。

一方、三遠南信地域にはJR飯田線という重要な社会インフラがあります。

三遠南信地域を縦断する中山間地域の貴重な住民の足ですが、残念ながら、現在は利用数が減少傾向にあると伺っています。川沿いや山際を走るすぐれた景観を誇る鉄道で、鉄道そのものが観光資源となり得ると感じています。JR東海さんでは「そよ風トレイン117」や「飯田線秘境駅ツアー」などを企画され、営業努力を積み重ねていますので、地域側としても、将来的にはリニア中央新幹線と併せて、ハイスピードな時間とスローな時間の両方を体験できる貴重な地域の宝として、飯田線の活性化も進めていく必要があると考えます。

リニア中央新幹線の飯田駅が設置されると、長野県以北も三遠南信地域の背後圏に加わってきます。三遠南信地域連携ビジョンには、三遠南信地域が日本の中央回廊として役割を持つことが示されていますが、太平洋から日本海までを展望できることは、観光のみならず、産業全体として大いに魅力を感じるどころです。

この広がりを持って三遠南信自動車道、そして、浜松三ヶ日・豊橋道路の整備を進めることが、リニア中央新幹線が開通する17年後を展望

する上でも重要と考えます。

コーディネーター



新東名高速道路が、2014年に引佐から御殿場まで開通予定、それから、リニア中央新幹線が2027年に東京から名古屋まで開通予定ということで、東西の高速交通がしっかりとできてきます。ここにやはり高速移動をしっかりと支える南北軸ができることで三遠南信の高速移動時代が明示されてくるという印象を強く持ちました。そのために、三遠南信自動車道を集中的に整備することが非常に重要と感じます。

次に、この道をどう使うかということになりますが、産業面から三遠南信をどう考えるかについて、ご意見をいただきます。

パネリスト／豊橋市 佐原市長

平成22年3月に国から同意をいただいた三遠南信地域基本計画の概要について、ご説明します。

三遠南信地域の県、市、そして経済団体、産業支援機関などの12機関で構成します三遠南信地域産業活性化協議会が主体となりまして、今後、この地域において国際優位性の高まりが期待される5つの広域的な産業クラスタープロジェクトについて、その形成、関連する人材の育成、事業環境整備を推進するというものです。

5つのクラスタープロジェクトですが、まず一つ目が、次世代輸送機器産業クラスタープロジェクトで、ホンダ、ヤマハ、スズキと大変大

きな集積を抱え、知的財産もたくさんある遠州地域が中心となって取り組みます。

二つ目が、航空宇宙産業クラスタープロジェクトで、航空計器等を中心に、精密機器分野を得意とする南信州地域が中心となって取り組みます。

三つ目が、健康医療産業クラスタープロジェクトで、医工連携、健康医療産業が盛んな遠州地域が中心となって取り組みます。

四つ目は、新農業クラスタープロジェクトで、農業算出額が日本一の東三河地域が中心となって取り組みます。

そして五つ目が、光電子産業クラスタープロジェクトで、ノーベル物理学賞につながったカミオカンデの計器が作られた浜松地域で取り組みます。

それぞれの地域は、特色ある産業、そのための知的財産と人的財産を持っている地域ですが、その地域に限らず、三遠南信地域の様々な地域がそれぞれ特色ある技術を持ち寄り、地域が一緒になって新産業集積と基幹産業化を目指します。それぞれの地域がプロジェクトを進める中でますます連携を深め、さらなる国際的優位性を高めていくための計画にしていきたいと思えます。

パネリスト／浜松商工会議所 御室会頭



この三遠南信地域が持つ産業の技術力、あるいはノウハウ、またマンパワーを生かして新たな産業を生み出そうという取り組みが進められていきます。プロジェクトは、電気自動車、電

動バイク、また、鉄道車両などのコア技術に取り組む次世代輸送用機器クラスターや航空宇宙産業、比較的景気変動の波を受けにくい健康医療産業、農業、それから光電子産業、こういったものを形成して新たな付加価値を創造し、当該企業集積の拡大を進めていくもので、いずれのテーマにしても、これまで地道に取り組みが行われ、既に相当なノウハウが蓄積されており、技術的な研究などもかなりのレベルに達しているという認識を持っています。

ただ今後、こうした取り組みからさらに一歩進んで新たな市場を生み出していくことや、あるいはいかかにして企業の直接的な売上に結びつけていくのが求められます。

また、新たな産業創出と併せて考えるべきことは、既存産業の構造転換で、産業革命への対応という認識をしています。

これは、いわゆる脱化石燃料への対応ですが、浜松市において次世代環境車社会実験協議会が今年の10月から電気自動車あるいは電動バイクの走行実験を始めています。

次世代エコカーの普及を視野に入れ、産学官の連携により地域としてどう対応するかを検討していくことから、今後の展開に商工会議所としても大変期待をし、注目をしているところで

す。特に浜松は自動車、オートバイ部品の製造に携わる企業がたいへん集中しており、まだ電気自動車が普及する時代は当分先のこともかもしれませんが、今のうちから先を見て手を打っていないと手遅れになるという危機感を持っています。

ちょっと乱暴な試算ですが、ある統計を見ると、ガソリン車が全くなくなると浜松地域の自動車関連産業の出荷額は半分に減るという試算があります。商工会議所としては、これらを踏まえ、既存の技術をこうした分野にどう生かしていったらいいのか、また次世代エコカーに対応して、新たな研究開発をしてみたらどうかと

いった選択肢を地域企業のみなさんにぜひお示ししていければと思っています。さらに、こうした取り組みをぜひ三遠南信地域全体へ向け、横展開をしていくことができれば、可能性がもっと広がると思います。

パネリスト／豊橋商工会議所 吉川会頭



三遠南信地域は、農業分野においても我が国有数の実績を誇っている地域です。産出される農産物は、野菜、畜産、果樹、花卉、米など多彩で、古くから革新的な農業経営に取り組んでいる地域という特色を持ち、農業を取り巻く産業集積や、関連の製造業、流通業、外食産業、食品加工業なども展開されています。

こうした食と農を扱う業種を連携させながら新たな価値を創造し、地域産業を生み出そうということで、平成19年6月より、東三河の支援機関や民間企業が主体となり、食農産業クラスター推進協議会が発足しました。この協議会においては、地域産品を活用した商品開発、輸出拡大事業など、様々なプロジェクトを展開しています。豊橋商工会議所でも、関連ベンチャー企業の創出を微力ながらお手伝いしています。

また、設立以来の考え方として、三遠南信地域に広域展開する視点を持って取り組んでおり、浜松商工会議所や飯伊地域地場産業振興センターなどの支援機関のほか、遠州や南信州からも意欲ある企業に参画いただいているところです。

三遠南信地域は、輸送機器や精密機械などを

中心として、優秀な技術を持ったものづくり産業の集積地域ですので、ITや品質管理など、製造業の技術やノウハウを生かした農商工連携の取り組みが今以上に進むものと考え、会議所として積極的に、そのお手伝いをしていきます。

植物工場に関する技術開発や地域産品を活用した三遠南信ブランドの創出などには広域的に取り組む時期に入っていると思います。こちらでも会議所として積極的にお手伝いし、地域の活性化に一役買っていきたいと考えます。

コーディネーター

三遠南信地域は、歴史、文化、自然など、多様で魅力ある地域資源があります。つづいて「風土」の分野についてのご発言をいただきます。

パネリスト／飯田市 牧野市長



この三遠南信地域は、たいへん地域資源が豊かなところだと思います。

例えば、南信州地域の観光をけん引する南信州観光公社は、年間2万5千人の方々をこの地域にお迎えして農家民泊を行っています。約500軒もの農家が受入先となり、農業と観光をミックスさせた体験教育旅行やワーキングホリデーといった取り組みをしています。また、一本桜が多いという地域の資源を生かし、春にはそれらの桜をめぐる「桜守の旅」というツアーを実施していますが、年々人気が高まっているほか、JR東海さんと連携した飯田線の秘境駅ツアー、名勝天龍峡の再生プロジェクトも注目を集めて

います。

伝統的な民俗芸能では、12月1日からシーズンとなる遠山郷の霜月祭りが傳承されていますが、遠州や東三河から観光に訪れていただいていることから、三遠南信地域の中で、こうした風土に根差した取り組みが注目されていると感じています。

パネリスト／飯田商工会議所 柴田会頭



三遠南信「街道浪漫」クイズラリーを今年の7月から11月末まで実施しています。

この三遠南信地域の観光スポット30カ所を回って、それぞれ観光スポットに関するクイズにお答えをいただくというラリーですが、かなりたくさんの方が挑戦をされ、たくさんのご応募をいただいています。

こういった地域資源を活用した取り組みを推進することがとても大切だと思います。また、活用することが保全にもつながり、各地域での情報を集約して、それを発信することで連携や支援の可能性がさらに深まっていくと考えます。

コーディネーター

風土に関する人材の育成ということで、コミュニティビジネスなど地域社会を支える雇用創造、また、多様な風土を生かして住む魅力をつくるという点で、流域圏の定住についてご発言いただきます。

パネリスト／豊橋市 佐原市長

三遠南信地域連携ビジョンの基本方針の一つ

に、「自然資源の循環や流域での定住化等の推進を図り、中山間域を活かした新しい地域発展のための流域モデルの形成を目指す」とあります。

東三河地域では、現在、中山間地域における移住・定住促進、そして、中山間地域の活性化に貢献できる取り組みとして「東三河シニアリフレッシュ事業」を実施しています。

この事業は、東三河全8市町村で組織する東三河広域協議会が平成19年度から行っています。都市部の団塊の世代を中心としたシニア層を東三河の中山間地域に呼び込んで、地域体験や職業体験といった滞在型の体験プログラムを通じて心身ともにリフレッシュし、新たな生きがいを感じていただくとともに、第二のふるさとを持っていただく事業で、将来的には、就業に意欲的なシニアを発掘して、二地域居住、移住・定住に結びつけていきたいと考えています。

具体的には、平成19年度と20年度の2カ年で準備をし、21年度に調査モニター事業として3泊4日程度の短期滞在型の地域体験プログラムをまず実施しました。

プログラムでは、奥三河の伝統産業の林業、酪農、炭焼き等において、多彩なスキルや技術を持った名人と時間を過ごし、地域の魅力を堪能しながら、伝統ある産業に触れていただきました。この調査モニターには、愛知県だけでなく、静岡、長野、兵庫から、定員いっぱいの47名にご参加いただきました。

今年は、新たに1週間から1カ月以上の長期滞在型の地域産業支援プログラムを開始します。既に、地域産業支援プログラムにも数名の参加があるなど、こうした取り組みを展開する中で、都市部から中山間地域へと人が集まっています。

しかし、中山間地域での生活に関しては、道路や高度医療体制の整備の遅れや、働く場所が少ないなど、まだまだ多くの課題も抱えていることは事実です。

今後さらにこのような事業を拡大していくためにも、中山間地域のインフラ整備、そして、

雇用創出に向けた取り組みに力を入れていく必要があると強く感じています。

いずれにしても、こうした取り組みを東三河だけでなく、広がりを持って実施していくことが三遠南信地域における中山間地域の活性化につながっていくと考えます。



パネリスト／飯田市 牧野市長

南信州地域においては、全国に先駆けて定住自立圏構想を進めていまして、ちょうど10月28日と29日に定住自立圏の全国市町村サミットがこの飯田で開催されました。この取り組みは全国的にも注目をされているところですが、やはり、この生活圏、経済圏というものを一にする地域が一緒になって、地域医療や産業振興を考えていくことが必要な時代だと思います。

また、この流域圏でも、上流域と下流域が一緒になった形でこの役割分担していくことについて、三遠南信地域連携ビジョンの中で議論し、それを実践していくことが重要になると思います。

防災における一つの例ですが、当地域は、7月に集中豪雨の影響でかなり被災し、大きな傷跡を残しました。このときには、この三遠南信災害時相互応援協定のおかげで、圏域内から応援として、給水車の派遣をいただきました。

やはり、地域で暮らしていくためには、こうした安全・安心をいかに確保していくかが重要で、広域においてもこうした安全・安心の確保について、考えていくことが大切と痛感したと

ころです。

パネリスト／浜松市 鈴木市長



やはり広域連携の中で、大きな威力を発揮するのは、防災の協力だと思います。当市は5月から消防ヘリの運用を開始しましたが、浜松市内だけの運用に留めることなく、広域にカバーをしていくこととしました。年中、山火事や海難事故が起こるわけではないので、日常的には医療を支える点がヘリの活用において最も重要な部分ではないかと考えます。消防ヘリという名前はつけていますが、救急搬送用のヘリとして大いに活用してほしいという思いがあります。

特に、この三遠南信地域は中山間地域がとても広いことから、救急医療、何か起こったときの対応が大きなポイントとなります。

各地域に立派な病院をつくらせていくことは、難しい状況ですので、各地域からスピーディーに患者を搬送することが重要となり、そのときにヘリがたいへん役立つと思います。

浜松の聖隷病院では、全国でいち早くドクターヘリを導入していますので、まず一義的にはこのドクターヘリが頑張ってくれていますが、それを補完するものとして、浜松から三遠南信地域で協定を結んだ自治体へ20分で到着するこのヘリが、特に高度医療が必要な場合に大きな威力を発揮すると思います。ぜひ、この三遠南信地域の連携の一つのシンボルになればと思います。

ただし、ヘリが運用されても最終的にはやはり一体的な道路が重要ですから、三遠南信自動

車道の整備がとても大事だと改めて感じます。

コーディネーター

「道」あるいは「技」「風土」「山・住」の政策を、地域主権時代の中でどうやって進めていくかが次の話題です。これはたいへん重要です。県境地域連携のモデルである三遠南信が、これをブレークスルーすることで全国の県境地域がこれに続く可能性があります。県境に接した市町村数は全国の市町村の38%であることから、全国的に注目を浴びているところです。

最初に、経済界からご意見をいただきます。

パネリスト／浜松商工会議所 御室会頭



三遠南信自動車道建設促進期成同盟会が設立されたのは昭和59年ですので、私たちが道路建設に取り組んで26年、四半世紀以上が経過し、このサミットも6巡をして18回目の開催となりました。

この間、三遠南信の交流や連携の取り組みとして、三遠南信地域連携ビジョンの作成とか、あるいはSENAの設置が行われ、体制は着々とつくられてきましたが、ただ、本当に目に見える結果または成果として、地域のみなさんに実感していただけるものは、まだちょっと少ないのではないかと思います。

今年の春に、私は中国へ行ってきましたが、日本と中国で決定的に違う点は、道路関連でもやはり開発のスピードが違うことです。当然、日本と中国では政策決定のプロセスが大きく違

いますので単純に比較することはできませんが、時間を費やすことはコストがどんどん積み重なって、「機会のロス」が発生します。そのため、我々はこれからも政府への働きかけを徹底して積極的にいき、道路整備はもちろん、産業振興についても、三遠南信地域が一丸となって、次々と提案あるいは提言をしていくことが今後の方策としては必要ではないかと強く感じています。



パネリスト／豊橋商工会議所 吉川会頭

三遠南信地域連携ビジョンに掲げた重点プロジェクトについては、インフラの整備、あるいは中山間地域の振興について、みなさんから意見が多かったことから、行政のリーダーシップを期待しながら、商工会議所、産業界としても、連携しながら力強く進めていくことが肝要と考えています。特に、産業分野での連携の実現につなげて新産業を創出するためには、我々民間の力を生かすことも重要ではないかと考えます。

私自身も豊橋信用金庫の理事長をしていますので、手前みそになって恐縮ですが、三河地域の五つの信用金庫が連携をして、豊橋技術科学大学への農業関連寄附講座を4年間開催していますが、ここに来て、農業に従事する方、新しい農業に取り組む方が生まれるなど、成果に結びつく形になっており、今後が期待されています。

明日は、第3回目の三遠南信地域の8つの信用金庫による三遠南信しんきんサミットが開催

されますが、こちらも、先ほどの農工商連携と同様に、産業界から広域的に地域の皆様のお手伝いをしながら連携していくという形ではないかと考えます。こうした取り組み以外にも、三遠南信地域においては多様で優秀な技術力を持った企業が地域の枠組みを越えて連携を進めていることはご承知のとおりですが、こうした取り組みがさらに加速し、有効に機能する体制が今後必要ではないかと考えます。そのためには、行政や経済界だけではなく、大学などのあらゆる主体を巻き込んだ体制づくりを進めていく必要があると考えています。大学との連携については、地域産業に人材を供給するという側面もありますので、若年人口が減少に向かう中において重要な位置づけにあると考えています。

ここ数年、経済、行政など、あらゆる分野で劇的な変化が起きてきていますので、それが地域に与える影響も大きいものがあります。スピード感を持って連携事業を実行できる新しい体制づくりを望みます。

パネリスト／飯田商工会議所 柴田会頭

これからの三遠南信地域の歩み方を考えていく場合に、この地域では、三遠南信の道路、リニア中央新幹線の話者を抜きに考えることはできません。これらのも早い開通を願うところですが、これらによる東西の高速移動時代を見据えた地域づくりをしていく必要があると考えます。

最近、当地域に豊橋技術科学大学のラボができましたが、今後も大学との連携を進めていくことがたいへん大事だと思います。また、当地域の特色ある産業である航空産業など、三遠南信地域の特色ある産業を世界に発信して、三遠南信地域を世界にアピールしていくことが大切だと思います。この地域は、三遠南信「街道浪漫」クイズラリーで取り上げられたように、たくさんの観光資源がありますが、それらの観光資源をどう生かしていくかをこの三遠南信地域

全体で考えていくこともたいへん大事だと思います。さらに企業誘致においては、現在の経済状況などを鑑みるとなかなか難しいところですが、行政に一層ご尽力をいただく中で取り組んでいきたいと思ひます。

いずれにしても、この三遠南信地域の将来を見据え、南信州地域でも役割をしっかりと果たして、みなさんと協力して地域づくりを進めていきたいと考えます。



コーディネーター

官と民の連携の中で、2年後に新連携組織への移行という計画を踏まえて、行政からご発言いただきます。

パネリスト／豊橋市 佐原市長



18年間、三遠南信サミットを続けてきている中で、行政の連携だけではなくて、議会、そして経済界、大学、それからしんきんサミットを開催する信用金庫等金融機関、さらにNPO法人等と様々な機関によって多岐にわたる連携が進展してきたと思ひます。その中で、今年度に

一つの成果が出たと思う事業が、三遠南信地域社会雇用創造事業です。SENAは、内閣府が全国から募集した事業実施団体に選ばれ、7億円という多額の交付金を受ける中で、社会的企業分野での雇用創出と人材育成を目指して事業に取り組んでいます。この事業をSENAが実施できるのも、これまで三遠南信地域で積み重ねてきた連携、県境を越えたビジョンの策定、そしてビジョン推進をする取り組みを続けてきたことに対して評価されたものもあり、たいへん価値がある成果だと考えます。

私たちは、2年後の新連携組織への移行を目指して、SENAの具体的な強化策をしっかりと立て、取り組んでいかなければいけないと思います。そうすることで我々の連携のさらなる強化、そして融合に向けたステップを踏み出していくことができると思います。そして、各分野の事業でそれぞれの連携を進めていく中で、その習熟度により国の機関から直接仕事を受けていく、また国の肩代わりもしていく、そんな方向も一つの方向としてあり得るのではないかと考えます。いずれにしても、本日お集まりの皆様方のお力添えがなくては三遠南信地域のさらなる発展はありませんので、ぜひ、皆様方のお力添えをお願いいたします。

パネリスト／飯田市 牧野市長



今回の三遠南信サミットは、テーマを「地域主権時代における県境地域連携モデルの推進」、「融合に向けた自発的な地域づくりの実践」と

して議論が進められていますが、やはり、平成24年度に予定しているSENAの新連携組織への移行については、今からしっかりと議論をしていかなければいけないと思います。この県境地域の連携モデルは、全国でも類まれな取り組みであると思いますが、一方、いわゆる県レベルにおいては、関西地域における関西広域連合の設立、あるいは九州における新しい機構についての考え方が打ち出されている状況の中で、住民に最も近いところで行政を行っている市町村が、県境を越えて一体どのように連携し、その連携を強めていくかを真剣に考えていく必要があると思います。ちなみに、まだ県境を越えた市町村レベルでの広域連合は全国でも例がありません。私はそれも視野に入れながら、これからの議論を進めていくことが一つ有力な選択肢と考えます。そして、そうした考え方をもとに、この産業界や大学、あるいは住民と一緒に、この地域の新しい連携モデルをつくっていくことができればと思います。

コーディネーター

官民が一体となった組織体、それから、国を肩代わりして事業が実施できる組織体、そして、関西は7県の広域連合ができましたが、市町村で新たな地域主権時代の受け皿になる広域連合をつくりあげるなど、順次ご提示をいただきました。最後となりますが、SENA会長の鈴木浜松市長からご意見をいただきます。

パネリスト／浜松市 鈴木市長

地域主権時代の中で、我々がこの広域連携を今後どうしていくかを考えるため、今回、地域主権を強く打ち出しています。現在、国においても地域主権改革が推進をされていますが、この究極の図柄は、基礎自治体を中心とした国ですので、基礎自治体、いわゆる市町村に最大の権限と財源が移譲され、我々が自らの力と自らの意思で地域をつくり、自立することが必要に

なります。つまり、都道府県の枠組みに捉われず、ここをどうやってブレークスルーしていくかが大事だと思います。

いろいろと都道府県の成り立ちを調べてみましたが、この枠組みが一番変化をしていません。江戸時代から明治時代が変わるときに75の府県ができましたが、その後、大久保利通公らが半ば強制的な合併政策を行い、中央集権国家をつくる支障にならないように地方政府を38まで減らしました。

しかし、その後に分離運動が置き、最終的には明治23年に香川県が愛媛県から独立し、47府県ができたと思いますが、それ以来、戦争があっても社会の変化が起こっても、人口が移動しても、47都道府県の枠組みは一切動いていません。

今、国の出先機関の話もいろいろありますが、究極の国の出先機関が都道府県ですから、ここをどうブレークスルーしていくかがとても大事になります。



平成18年に、道州制が実現をした場合には、三遠南信地域の自治体は同じ道州を目指すという決議をしたことは大変に重要なことだったと思います。また、中部圏広域地方計画の中に、この三遠南信地域の位置づけがしっかりされているのは、我々が今後、大きな変化の中で一体となって動いていくことの意味合わせをしたと言ってもいいと思います。そういう意味でも、この県境を越えた広域連携としては特筆すべき連携であり、平成24年度からの新連携組織へどう移行していくのか、さらに、どういう連携を

して、また、どういう組織とするかがたいへん重要になります。ぜひ、みなさんからいろいろなご意見、お知恵をいただきながら、しっかりと議論をしていきたいと思っています。

コーディネーター

前半では、三遠南信地域連携ビジョンのテーマごとの方向性、そして後半では、新連携組織に向けた方向付けについて意見をいただきました。これから官、民、大学等を加えて、新しい連携組織の方向性を議論していく段階に我々はいることを確認できたと思います。

後ほどの分科会で、このトップ対談の中で出ましたご発言を深化いただき、サミット宣言にまとまっていけば、今回のトップ対談の結果がさらに生きることになると思います。